

# 日本呉音と呉方言の音韻的対応関係 主に梗撰字の音価を中心として

全 昌 煥

## 要 旨

日語呉音中の梗撰字同蟹撰字一樣被認為是呉音の難解之謎。從中国南北方言發展狀況來看、呉音の梗撰字的主要元音与呉方言密不可分的关系、漢音の梗撰字与北方官話基本上相趨一致。對於這一問題前輩学者的看法有一定的局限性。其主要問題在於是否承認日語呉音の梗撰的主要元音与中国古代音韻体系有關。如果只按照切韻体系对這一問題進行分析，確實面臨無法解的難題。

本文拟以中国南北方言的地理分布以及魏晉南北朝詩歌內容為分析材料、对日語呉音梗撰字の問題進行探討。

キーワード……呉音 漢音 呉方言 梗撰字 陽韻

## 一、始めに

日本呉音体系の中で、梗撰字は蟹撰字と同様最も大きな問題点を抱える内容とされている。問題点の中心は切韻に代表されている中古音体系と比較した場合、工列音として具現すべきところにア列音として現れてくることにある<sup>1)</sup>。

この問題を究明するに当たり、従来の研究には大きな不備があるように思われる。その原因としては次の二点が考えられる。一つは文献資料だけにこだわった結果、問題解明の糸口を見出すに当たって朝鮮漢字音の影響であろうと指摘する結末を呼び、この問題に関する更なる研究が棚上げされてしまったこと、もう一つは中国の方言の中に呉音体系の梗撰字と関連付けられる音韻的要素が存していることを指摘しながらも、それを踏まえた上での深い追求がほとんどなされていなかったことである<sup>2)</sup>。

日本呉音体系の梗撰字と中国の方言音との間に関連付けられる音韻的要素が存していることを指摘しながらも深く追及しなかったことは、惜しまれる点であるが、中国の方言事情を視野に入れながら呉音の梗撰字の祖系音を考える際、溯上して古代の音韻実態と結びつけて問題解明を図っていくには確かに大きな難問が立ちはだかっていたことは想像し難くもない事実である。

本論では従来の研究における欠陥を補うことを旨とするが、その試みとして現今の研究成果

を吸収しつつ、中国に於ける方言事情と魏晉南北朝時代の詩歌の韻脚についての考察によって呉音体系の梗撰字の祖系音について考えてみたい。

## 二、梗撰字の問題点

### (一) 梗撰字

原音側において、日本呉音の梗撰字がア列音と表記されることに関連付けて考えられる内容としては、古代の音韻変化と今の呉方言に見られる「白讀」体系が取上げられる<sup>3)</sup>。まず中古音の梗撰字を概観するが、次の通りである(は梗撰に一等字がないことを示す)。

表 1

等列	開 口	合 口
一等韻		
二等韻	庚/e <sub>ŋ</sub> /・耕/e <sub>ŋ</sub> /	庚/ue <sub>ŋ</sub> /・耕/ue <sub>ŋ</sub> /
三等韻	庚/ɿe <sub>ŋ</sub> /・清/ɿe <sub>ŋ</sub> /	庚/ɿue <sub>ŋ</sub> /・清/ɿue <sub>ŋ</sub> /
四等韻	青/ie <sub>ŋ</sub> /	青/ie <sub>ŋ</sub> /

主に王力(1980)/(1985)・藤堂明保(1965)・李栄(1952)等を参考に作成

このように切韻に代表される中古音体系によると、日本呉音に現れる梗撰字のア列音は解明しがたいものである。それに対して漢音の場合は、梗撰字の三等字・四等字がエ列音として取り入れられており、二等字を除き、その解釈に基本的には何等の問題点もないことになる。

それではこの問題点をいかに捉えるべきかが最も肝心な課題として浮上してくるが、それはまず梗撰に属する各韻の出所来歴を考えなければならない。通説によると、先秦・両漢の陽部字「英・京・兵・明・萌・庚・兄・行・卿・衡・横・享・羹・迎・彭・坑・觥・杭・竟・病・景・梗・慶・永・泳」等は中古の切韻系では梗撰字へと変化していく<sup>4)</sup>。

その中には陽部二等字「行・羹・明・梗・彭」等が梗撰二等字となる字群、陽部三等字「慶」等が梗撰三等字となる字群と陽部四等字「兵・英・明・盟・景・兄・永・泳」等が梗撰三等字となる字群等がある。

これらの字は北方官話では既に狭母音化により主母音が/i/もしくは/a/となり、ごく少数の字例を除き/a/はほとんど存在していない。それに対して南方系の呉方言では/i/・/ə/のほか/a/が多数残っている。特に中古音の影響を蒙ったとされる「文讀」体系では北方官話の影響により狭母音/i/・/ə/が現れ、呉方言特有の音を伝えるものとされる「白讀」体系では未だに/a/が数多く残存している点は、注目に値するものである。また南北において等列ごとに後世の狭母音化への移行は均一的なものではない。南北に共通する点は二等字の変化が遅く、三等・四

等字のほうが速いことである。また南北の差異としては、北方の方が先んじて狭母音化し、南方の方がかなり遅れて進行している点である。

中古音体系で解釈が不可能とされている切韻系の梗撰字の音価を考える際、このような歴史的流れを重く見なくてはならないと考えられる。

## (二) 先行研究

従来の呉音研究においては、梗撰字の音価について、特に呉音の梗撰字の祖系音について如何なる考察が行われてきたか。まずこれについて簡単に触れておくこととする。

藤堂明保(1969)は齋・清・錫韻について、中古音体系と比較した場合、その主母音は/e/・/ɛ/のようなものであって、「なぜ呉音でそれを「齋(サ)」「青(サウ)」「錫(サウ)」のようにア類・ヤ類の母音に表記したものが、その原因は千古の謎である。たぶん呉音の源流をなした六・七世紀の朝鮮の漢字音に、このような特殊な癖があったのだらうと考えられるが、それは推測の域を出ない。」としている。藤堂明保(1980)は呉音の匣母の子音を考える際、呉方言の/h/との関連性を指摘するが、この問題に関しては呉方言と呉音との繋がりについては言及せず、朝鮮漢字音の影響であらうと指摘するに止まっている。

高松政雄(1986)は「現中国方言にai iaŋ形が存することは、あるにはある(粵音・客家音系)。……これが、他のものと等し並に切韻を基準としては理解し得ぬ音形である以上は、往昔の或癖のある方言の系譜かと考えざるを得なくなる。」としている。

高松政雄は中国の粵方言と客家方言の中に呉音とつながりを持ちうる/a/が存していることは認めながらも、溯上して古代の音韻体系の中での対応関係が存していたか否かについては、かなり消極的な姿勢を示している。結局のところ、切韻体系の文献資料では解明できなかったというにほかならない。

近年の新しい研究成果として注目されているものには張光宇の説が取り上げられる。張光宇(1991)は、梗撰の場合、南方系で広母音/a/が残されているのに対して、北方系で狭母音/i/・/e/しか残っていないことから古代の北方系でも広母音の/a/が存していただらうと推測している。張光宇の見解は方言分布の内容をもって古代の音韻変化を考えようとしたものである。しかし北方系で何時頃梗撰の/a/が/i/・/e/へと変化したかについては明記していない。

従来の研究においては、主に中古音体系に着目していただけに藤堂明保(1969)では、梗撰のア列音表記を朝鮮漢字音に影響されているのだらうという方向性を示すこととなったが、藤堂の説が成り立つためには、まず今の呉方言を含めた中国の諸方言に日本呉音と関連付けられる音韻的要素が皆無であるということが予め証明されなければならない。しかしながら現代呉方言に見られる広母音の/a/の分布等からすると、藤堂明保の見解に疑いをかけたくるのである。

高松政雄(1986)が中国の粵音系・客家音系に呉音と対応する音韻的内容が存したことを指摘したことは、一つの大きな進展であるといえるが、呉方言に粵音系・客家音系と同様のものが

存していたことに気づいていなかった点、さらに遑って日本呉音の音価との比較のことについて消極的姿勢を示していた点は当時の研究の宿命的流れであったかもしれない<sup>5)</sup>。

しかしながら現代呉方言に呉音のア列音と対応するものが規則正しく存している事実、さらに後述のように南北朝期の詩歌の韻脚にも日本呉音との対応が見られる点等を総合的に考慮した場合、原音側の音韻的事象から日本呉音との比較を試みる必要が生じる。

### (三) 呉音と漢音の梗撰字

呉音と漢音の梗撰字の違いは何であるか。それには等列が主母音及び介音の差によるものとする従来の伝統的理論に基づき、呉音と漢音の音価の差異等について考察を試みる必要がある。後述の原音側の場合も、同じく等韻理論をもって分類・処理していく。

まず次の表で呉音と漢音の梗撰字を概観しておくこととする。

表 2

等列	中古音	呉音例字	漢音例字
二等	庚/ɛŋ/	<sup>ミヤウ</sup> 猛・ <sup>シヤウ</sup> 生・ <sup>キヤウ</sup> 坑・ <sup>キヤウ</sup> 更・ <sup>ギヤウ</sup> 行	<sup>マウ</sup> 猛・ <sup>セイ</sup> 生・ <sup>クワ</sup> 坑・ <sup>クワ</sup> 更・ <sup>クワ</sup> 行
	庚/ueŋ/	<sup>クワウ</sup> 鑛・ <sup>クワウ</sup> 礦・ <sup>クワ</sup> 横	<sup>クワウ</sup> 鑛・ <sup>クワウ</sup> 礦・ <sup>クワウ</sup> 横
	耕/ɛŋ/	<sup>ミヤウ</sup> 萌・ <sup>シヤウ</sup> 争・ <sup>キヤウ</sup> 幸・ <sup>シヤウ</sup> 諍・ <sup>キヤウ</sup> 莖	<sup>マウ</sup> 萌・ <sup>サウ</sup> 争・ <sup>クワ</sup> 幸・ <sup>サウ</sup> 諍・ <sup>クワ</sup> 莖
	耕/ueŋ/	<sup>クワ</sup> 泓	<sup>クワウ</sup> 泓・ <sup>クワウ</sup> 嶸
三等	庚/ieŋ/	<sup>ヒヤウ</sup> 兵・ <sup>ピヤウ</sup> 平・ <sup>ビヤウ</sup> 病・ <sup>ミヤウ</sup> 明・ <sup>ミヤウ</sup> 名・ <sup>ミヤウ</sup> 命・ <sup>キヤウ</sup> 京・ <sup>カウ</sup> 迎	<sup>ハイ</sup> 兵・ <sup>ハイ</sup> 平・ <sup>ハイ</sup> 病・ <sup>メイ</sup> 明・ <sup>メイ</sup> 名・ <sup>メイ</sup> 命・ <sup>グイ</sup> 京・ <sup>グイ</sup> 迎
	庚/iueŋ/	<sup>キヤウ</sup> 栄・ <sup>キヤウ</sup> 永・ <sup>キヤウ</sup> 詠	<sup>エイ</sup> 栄・ <sup>エイ</sup> 永・ <sup>エイ</sup> 詠
	清/ieŋ/	<sup>シヤウ</sup> 正・ <sup>シヤウ</sup> 声・ <sup>シヤウ</sup> 聖・ <sup>シヤウ</sup> 成・ <sup>シヤウ</sup> 盛・ <sup>リヤウ</sup> 令・ <sup>ピヤウ</sup> 並・ <sup>キヤウ</sup> 輕・ <sup>シヤウ</sup> 精・ <sup>シヤウ</sup> 情・ <sup>シヤウ</sup> 省・ <sup>イヤウ</sup> 盈	<sup>ゼイ</sup> 正・ <sup>ゼイ</sup> 声・ <sup>ゼイ</sup> 聖・ <sup>ゼイ</sup> 成・ <sup>ゼイ</sup> 盛・ <sup>レイ</sup> 令・ <sup>ハイ</sup> 並・ <sup>グイ</sup> 輕・ <sup>ゼイ</sup> 精・ <sup>ゼイ</sup> 情・ <sup>ゼイ</sup> 省・ <sup>エイ</sup> 盈
	清/iueŋ/	<sup>クマヤウ</sup> 傾・ <sup>クマヤウ</sup> 頂・ <sup>キヤウ</sup> 營・ <sup>キヤウ</sup> 穎・ <sup>キヤウ</sup> 營	<sup>グイ</sup> 傾・ <sup>クワ</sup> 頂・ <sup>エイ</sup> 營・ <sup>グイ</sup> 穎・ <sup>グイ</sup> 營
四等	青/ieŋ/	<sup>ヒヤウ</sup> 屏・ <sup>ミヤウ</sup> 冥・ <sup>チヤウ</sup> 聽・ <sup>シヤウ</sup> 定・ <sup>ニヤウ</sup> 寧・ <sup>キヤウ</sup> 刑・ <sup>リヤウ</sup> 靈	<sup>ハイ</sup> 屏・ <sup>グイ</sup> 冥・ <sup>グイ</sup> 聽・ <sup>グイ</sup> 定・ <sup>グイ</sup> 寧・ <sup>グイ</sup> 刑・ <sup>グイ</sup> 靈
	青/iueŋ/	<sup>クマヤウ</sup> 迥	<sup>グイ</sup> 迥

主に沼本克明(1982)・小倉肇(1993)・船城俊太郎(1993)等を参考に作成

呉音と漢音の梗撰各韻を比較した場合、その違いは次のように要約される。呉音の中で梗撰各韻の字はア列音で現れるのに対して、漢音では庚韻二等字・耕韻二等字がア列音で表記されているほか、庚韻三等字・清韻三等字・青韻四等字はエ列音で表記されている。これは呉音と漢音には異なる時代的要因と方処的要因が包含されていることを提示しているのである。さらにこの違いは、呉音の祖系音を追求する上で、貴重な資料を提供しているとも言える。

呉音と異なる漢音の特徴から呉音が伝来した時代的要因と方処的要因については、以上の共通点と相違点等で以って深く追求することが可能となる。

### 三、梗撰字の音価

#### (一) 中国言語音における梗撰字の南北差

梗撰字の南北差は、ひっくり返ると狭母音化への音変化が北方のほうが速く、南方のほうがかなり遅いということである。そして呉方言全体をみると、梗撰各韻のなかで量的な差は見られるものの、呉方言には未だに日本呉音と対応する/a/が実在しており、それが「白讀」体系として広い分布を持っている<sup>6)</sup>。下表の各字音は筆者の調査結果によるものである。注6を参照されたい。

表 3

等列	中古音	蘇州語例字	北京語例字
二等	庚/eŋ/	猛/mā / 生/sā / ; /sən/ 坑/k'ā / 更/kā / 行/fā /	猛/məŋ / 生/ʃəŋ / 坑/k'əŋ / 更/kəŋ / 行/xəŋ / ; /ciŋ /
	庚/ueŋ/	横/fuā /	横/xəŋ /
	耕/eŋ/	萌/mən / 争/tsən / 幸/fin / 莖 /tein /	萌/məŋ / 争/tʃəŋ / 幸/ciŋ / 莖 /tein /
	耕/ueŋ/	泓 / fiŋ /	泓/xuŋ /
三等	庚/ieŋ/	兵/pin / 平/bin / 病 / bin / 明 /min / 名/min / 命/min / 京/tein / 迎/ŋin /	兵/piŋ / 平/p' iŋ / 病/piŋ / 明 /miŋ / 名/miŋ / 命/miŋ / 京/teiŋ / 迎/iŋ /
	庚/iueŋ/	荣/fiŋ / 永/ioŋ / 詠/ioŋ /	荣/zuŋ / 永/yŋ / 詠/yŋ /
	清/ieŋ/	正/tsən / 声/sā / ; /sən / 聖/sən / 成/zən / 盛/zən / ; /zā / 令/lin / 並 /pin / 輕/tein / 精/tsin / 情 /zin / 省/sən / ; /sā / 盈/in / 嘗 /fin /	正/tʃəŋ / 声/ʃəŋ / 聖/ʃəŋ / 成/tʃ' əŋ / 盛/ʃəŋ / 令/liŋ / 並 /piŋ / 輕/te' iŋ / 精/tciŋ / 情/tɕ' iŋ / 省/ʃəŋ ; /ciŋ / 盈/iŋ / 嘗/iŋ /
	清/iueŋ/	傾/te' in / 營/fin / 穎/in /	傾/te' iŋ / 營/iŋ / 穎/iŋ /
四等	青/ieŋ/	屏/bin / 冥/min / 聽/t' in / 定 /din / 寧/ŋin / 形/fin / 靈/lin /	屏/piŋ / 冥/miŋ / 聽/t' iŋ / 定 /tiŋ / 寧/niŋ / 形/ciŋ / 靈/liŋ /
	青/iueŋ/	迴/tciŋ /	迴/teyŋ /

方言音を通時的に処理していく際、大橋勝男(1992)・馬瀬良雄(1964)等を参考にした。

ここで呉方言の代表として蘇州語を、北方方言の代表としては北京語を取り上げる。呉方言

の代表として蘇州語を取り上げたのは、蘇州語が言語音体系全般として呉方言の中で最も典型的であるという視点にしたがったからなのである。

梗摂各韻の南北差を概観した場合、次のように約言することができる。即ち、梗摂各韻の場合、北京語においては狭母音の*/i/・/ə/*が主母音であるが、蘇州では*/i/・/ə/*のほか、広母音の*/a/*が大量存している。

筆者の調査内容の詳細は別稿に譲ることとするが、筆者の調査によると、呉方言地域において梗摂字における*/a/*の量は呉方言地域の南部地方 温州へと向かうほど増える傾向が見られる。

梗摂字の上の表に基づいて少し拡張して北京語と呉方言全般を見ると、北京語では「盲」等の極稀な字例を除き、狭母音の*/i/・/ə/*が主母音である。上海・蘇州・温州等の呉方言地域では、*/i/・/ə/*のほか、数多くの*/a/*が見られる。以下調査結果に基づき、呉方言地域で広母音*/a/*の現れる梗摂字を等列別に取り上げる。

蘇州：[庚韻二等字] 猛・生・甥・牲・梗・更・羹・坑・横・行・杏・棚

[清韻三等字] 盛・省

上海：[庚韻二等字] 猛・孟・生・甥・牲・庚・横・行・杏

[清韻三等字] 盛・省

温州：[庚韻二等字] 猛・孟・生・牲・庚・羹・坑・横

[庚韻三等字] 明・景・迎

[清韻三等字] 盛・声・省

[青韻四等字] 絳・形・寧

以上のように呉方言全体としては、北方官話の北京語に比べて各等列に大量の広母音が残存している。呉方言地域の南部地方 温州では三等字の庚韻・清韻・四等字の青韻にまでも広母音の*/a/*がはっきり現れてくる。

特に一字兩讀の場合「白讀」に古い音が残り、「文讀」に中古音体系の音が残っていることは、大いに注目されるべき内容である。例えば「盛(清韻・三等字)」の場合、「姓」としては「白讀」の*/zɑ/*であるが、「茂盛」という文学的表現としての語彙では「文讀」の*/zən/*である。

上記の事例は梗摂字が*/a/・/e/(ə)/・/i/・/ə/*のルートを辿って変化してきたことを推定させるものである。

## (二) 通時的視点から見た梗摂字

### (1) 呉音と漢音の梗摂各韻の主母音

通説では日本呉音が400~600年頃の中国の音と対応しているとされる<sup>7)</sup>が、五・六世紀の音韻事情だけにこだわることは無理である。遡って先秦・両漢・魏晋時代を眺める必要があり、更に下っては唐の状況をも見極めることが要請される。

ここで主母音の差異に着目して、もう一度梗摂が呉音と漢音に見られる音韻の内容について整理しておき、原音側における対応関係について考えて見ることにする。

表 4

等列	中古音	呉音	漢音
二等	庚 /eŋ/	イヤウ(猛 <sup>ミヤウ</sup> )	アウ(猛 <sup>マウ</sup> )
	庚 /ueŋ/	ワウ(横 <sup>ワウ</sup> )	ウワウ(横 <sup>ウワウ</sup> )
	耕 /eŋ/	イヤウ(幸 <sup>ギヤウ</sup> )	アウ(幸 <sup>ギウ</sup> )
	耕 /ueŋ/	ワウ(泓 <sup>ワウ</sup> )	ウワウ(泓 <sup>ウワウ</sup> )
三等	庚 /i̯eŋ/	イヤウ(平 <sup>ビヤウ</sup> )・アウ(迎 <sup>ガウ</sup> )	エイ(平 <sup>ヘイ</sup> )
	庚 /i̯ueŋ/	ヰヤウ(采 <sup>キヤウ</sup> )	エイ(采 <sup>サイ</sup> )
	清 /i̯eŋ/	イヤウ(正 <sup>シヤウ</sup> )	エイ(正 <sup>セイ</sup> )
	清 /i̯ueŋ/	ウヰヤウ(傾 <sup>クキヤウ</sup> )・ヰヤウ(管 <sup>キヤウ</sup> )	エイ(傾 <sup>ケイ</sup> )
四等	青 /ieŋ/	イヤウ(定 <sup>ジヤウ</sup> )	エイ(定 <sup>テイ</sup> )
	青 /iueŋ/	ウヰヤウ(迥 <sup>クキヤウ</sup> )	エイ(迥 <sup>クエイ</sup> )

主に王力(1985)・沼本克明(1986)・高松政雄(1986)等を参考に作成

梗摂各韻は大きく二つのグループに分けられる。以下の通りである。第一グループ：二等庚韻・二等耕韻は呉音と漢音共にその主母音がア列音である。第二グループ：三等庚韻・三等清韻・四等青韻が呉音はア列音、漢音はエ列音である。

呉音の祖系音を追求するに当たり、第一グループと第二グループの境目を見極めることが、極めて必要である。現代方言事情が示しているように二等字の音韻変化はだいぶ遅れて行われたものであるが、南北朝時代において二等字と三等・四等字が押韻する傾向が著しかった地域はどこであるか。さらに後世の漢音に見られる三等韻と四等韻の狭母音化は当時芽生えていたのであろうか。このような連続的な発展と見られるような点の解明が呉音の母胎音を設定する上で何よりも大事なことになると思われる。第一グループと第二グループ両方とも音韻変化の時代的要因・方处的要因と互いに関連するものであるが、概ね第一グループは方处的要因と、第二グループは時代的要因というふうに対応しているものと捉えられる<sup>8)</sup>。

## (2) 韻脚に見られる梗摂と宕摂の関係

梗摂と宕摂の関係は『詩経』・『楚辞』にもその一端を窺わせるものがあることは既に先学の研究によって明らかにされている。『詩経』の「漢広」で後世の切韻の陽韻と庚韻が押韻しており、『楚辞』の「招魂」では切韻系の陽韻と清韻が押韻している<sup>9)</sup>。梗摂と宕摂が押韻する用例は両漢の時代・魏晉の時代にも見られる<sup>10)</sup>。また南北朝時代の南朝詩人の作品にも宕摂と梗摂

との押韻例が散見される。これは宕攝陽韻の字が梗攝に合流した音韻変化と関わるもので、上古時代とまた中古への過渡期となる南北朝時代の言語層を示しているものである。この流れは日本漢字音にも投影されて然るべきものだったのである。

日本漢字音の古層において見られる切韻系の梗攝庚韻字「明」と梗攝青韻字「寧」はいずれも主母音がア列音のものである。これについて大野透(1962)はこれらを「義字的仮名表記」とありとし、「これには漢韓の字音表記の影響は認められない事はいふまでもあるまい」とする。大野透は「明マ」と「寧ナ」については原音との関わりについては否定する立場を取っているのである。しかしながら上記のような古代中国の音韻変化及び梗攝と宕攝の関わりが少なくとも南北朝時期までを下限としてはっきりつかめ得るという点を考えた場合、「明マ」と「寧ナ」の主母音が中国側の音の影響によるものと認めても何等の矛盾もない。藤堂明保が梗攝字の主母音を朝鮮漢字音に求めようとした意図が大野透の説を汲んでのことであるか否かはさだかでないが、原音としての古代の中国語に見られる上記の音韻変化と現在の呉方言に残されている中古梗攝字の/a/を照らし合わせて考えた場合、ひたすら朝鮮漢字音に呉音のア列音表記の原因を求めた見解は見直す必要が出てくる。

それでは詩歌の韻脚に現れる梗攝字の音価について考えてみることにする。まず切韻時代の宕攝と梗攝の所属字は両漢時代の詩歌韻脚にその変化の流れが盛んに現れるが、そのパターンを纏めてみると、次の通りである(等列は便宜のために右下に小文字で示す)<sup>11)</sup>。

イ、庚<sub>2</sub> + 陽<sub>3</sub> 馬融：京生楊爽榮熒形 『広成頌』

生：切韻系の庚韻二等字；楊・爽：切韻系の陽韻三等字

口、耕<sub>2</sub> + 陽<sub>3</sub> 闕名：零情靈榮英聲譽城庭平良熒生宵 『冥字李翊夫人碑』

譽：切韻系の耕韻三等字；良：切韻系の陽韻三等字

八、庚<sub>3</sub> + 陽<sub>3</sub> 張昶：明成程榮馨穰 『華山堂闕碑銘』

明：切韻系の庚韻三等字；穰：切韻系の陽韻三等字

二、清<sub>3</sub> + 唐<sub>1</sub> 李尤：征鳴囊 『函谷闕銘』

征：切韻系の清韻三等字；囊：切韻系の唐韻一等字

ホ、青<sub>4</sub> + 陽<sub>3</sub> 張衡：聽刑傷 『觸體賦』

聽・刑：切韻系の青韻四等字；傷：切韻系の陽韻三等字

以上のように、両漢の時代において切韻系の梗攝と宕攝は密接な関わりを持つものであり、したがって、日本呉音の梗攝字が宕攝の陽韻と同じ主母音アを持つことは決して偶発的なものではなく、古代の音変化の流れを受け継いできているものである。

それに両漢時代に見られる梗攝韻と宕攝韻との「合韻」例からすると、宕攝の陽韻は梗攝のすべての等列と関連していることが分かる。従って日本呉音の梗攝字は、各韻すべてア列音に表記されている。それでは通説では日本呉音が紀元 400～600 年頃の中国の音韻体系を反映しているとされるが、両漢の詩歌の韻脚に見られる上記の音韻現象が果たして魏晋南北朝期にも見



られるのであろうか。その類例を取り上げることとする。

表 5

作者	時代	本籍	詩作	韻脚
傅玄(217~278)	魏・晋	陝西	『大晋承運期』	皇光衡明唐良康彊
潘尼(247~300)	晋	河南	『贈司空據安仁』	上敬競病
郭璞(276~324)	晋	山西	『江賦』	鏡映上詠
陸機(261~303)	晋	江蘇蘇州	『輿弟清河雲』	壤景
陸雲(262~303)	晋	江蘇蘇州	『贈顧尚書』	彰陽鄉揚張英
王僧達(423~458)	宋	本籍山東	『祭顔光祿文』	清声楊英

主に于安瀾(1936)・羅常培等(1958)・丁邦新(1975)・曹道衡等(1993)によって作成

三世紀から五世紀にかけて南北を問わず梗撰字と宕撰字の押韻が見られる。于安瀾(1936)は宕撰の陽韻と梗撰字が押韻するのは、南朝宋の王僧達に見られるのが最後であるとの主旨を述べている<sup>12)</sup>が、筆者の調べによると、必ずしもそうだと断定しきれないところもある。確かに時代が下るにしたがって宕撰の陽韻と梗撰字の押韻する用例が減少してくることは、事実である。しかしながら宕撰の陽韻と梗撰字の押韻する例がまったくないわけではない。南北朝期において北朝の詩人のなかには宕撰の陽韻と梗撰字が押韻する用例は確かに見当たらない。ただし用例の量は少ないけれども、南朝ではそれらしきものはまだその面影を偲ぶことのできるものである。南朝宋の鮑照の詩作『代白紵曲二首』は「句句用韻」の七言律詩であるが、第九句の宕撰字の「尚」は「遥韻」の形で前の梗撰字「莖・罌・争」と押韻しているのである。

類例はまた南朝梁武帝の作品『鳳笙曲』にも見られる。『鳳笙曲』の韻脚は「笙・鳴・停・楼・響・謳」である。この作品は「句句用韻」であって更に分けると、「一首両韻」である。「笙・鳴・停・響」が一韻で、「楼・謳」がもう一韻である。ここで更に細かく見ると、「笙・鳴・停・響」と「楼・謳」の関係は「交韻」型である。そうすると、宕撰陽韻字「響」と梗撰青韻字「停」等が一韻群であるからには、主母音が必ず一致するか、また近似した音価のものでなければならぬ。従って、結論的には「笙・鳴・停・響」が南朝梁の時代にもわりに近似した音価を持っていたということがいえるのである。更に言えば梗撰の「笙・鳴・停」が宕撰字「響」と同じく日本漢字音のア列音に対応し得る音価を持っていたと判断できるものである。

南北朝期に入って、時代が下るにしたがって梗撰字と宕撰字の押韻は減少する一途を辿るが、これには次のような解釈が可能となる。今日の呉方言に見られるように宕撰の陽韻字類は主母音が後舌の/a/で、梗撰字類の主母音は前舌の/a/である。このような資料に基づいて判断するならば、当時南朝では梗撰字と宕撰字が現代呉方言に見られるようなそれぞれ独立した音価を持つようになりつつあった可能性が指摘できそうである。

呉方言の梗撰字の/a/が唐以降の宋代(960~1279)においても見られるということは黄坤堯

(1998)に重要な示唆を含んだ指摘がある。黄坤堯は宋代の詞人呉文英の『風流子』で梗撰字「鶯・嬰・冷」が宕撰の陽韻字「涼・響」と押韻する現象について述べており、「この両類が押韻することは呉詞でわりによく見られる傾向である。」と指摘している。このように今の呉方言に見られる梗撰字の主母音が北方系と比較して、かなり遅れて狭母音化へと進行していることが把握できそうである。

### (3) 切韻系の反切における梗撰字

先行研究においては、梗撰字が日本呉音でア列音に表記されていることを不可解な現象とされているが、切韻系の韻目配列だけに着目すれば、それは極当然の結果であると考えられる。切韻系の韻書の中での「陽唐同用」、「庚耕清同用」等からも分かるように切韻系が反映している音韻体系において「宕撰」と「梗撰」は、確かに異なった系列のものであった。しかしながら、先秦・兩漢の時代の陽部字が梗撰字へと合流した音韻変化を見逃してはならないということをもあらかじめ念頭に置くべきである。

切韻系の韻書『廣韻』の梗撰字を見ると、その反切用例には「宕撰」との間に跨る一字兩讀のものが見られる。またそれは極少数の字だけではなく、相当の数があり、前切韻期における両者の関連を垣間見ることができる。この点等を考慮に入れた場合、梗撰字のア列音表記を果たして「千古の謎」と言えようか。甚だ疑問である。更に前述の呉方言の「白讀」に見られる梗撰字の主母音が/a/であること等を考えあわせると、日本呉音の梗撰字ア列音表記をひたすら朝鮮漢字音から問題解明を図った仮説が成り立たないことも容易に分かる。

「宕撰」は呉音と漢音において一貫してア列音として現れてくる。これは宕撰の陽・唐韻が上古音でも中古音でも日本語のア列音と対応する/a/(上古音)・/a/(中古音)であったことと音韻的に規則正しく対応しているものである。したがって、前切韻時代に於ける五・六世紀の梗撰字が日本漢字音のア列音として対応しうるものであるか否かの判断を迫られる際に、必ず「宕撰」との関係を視野に入れる必要が生じる。

次に紀元601年陸法言等によって著作された『切韻』で梗撰と宕撰とに関わる反切例を見ることとする。このような反切例は古代においては詩歌の韻脚における梗撰と宕撰両者の関係が浮き彫りになるばかりでなく、現代呉方言に見られる音韻体系の解釈にも十分対処しうるものが含まれていることが分かる。

庚韻二等字の場合、次のような反切用例が見られる<sup>13)</sup>。

阮 客庚切(庚韻) / 府浪切(宕韻)	橫 戸盲切(庚韻) / 古黄切(唐韻) / 戸孟切(映韻)
侷 古横切(庚韻) / 古黄切(唐韻)	硿 客庚切(庚韻) / 府浪切(宕韻)
榜 甫孟切(庚韻) / 北朗切(蕩韻)	髻 薄庚切(庚韻) / 北朗切(蕩韻)
莠 薄庚切(庚韻) / 北朗切(唐韻)	駟 薄庚切(庚韻) / 甫盲切(庚韻) / 歩光切(唐韻)
言 匹庚切(庚韻) / 許兩切(陽韻)	斛 薄庚切(庚韻) / 普郎切(唐韻)

槍 楚庚切(庚韻) / 七羊切(陽韻)	霽 於驚切(庚韻) / 於良切(陽韻)
鈇 於驚切(庚韻) / 於良切(陽韻)	隴 戸盲切(庚韻) / 胡光切(唐韻)
磅 撫庚切(庚韻) / 普郎切(唐韻)	堂 直庚切(庚韻) / 昌兩切(養韻) / 之亮切(漾韻)
鱸 巨渠切(庚韻) / 巨良切(陽韻)	肱 戸庚切(庚韻) / 胡郎切(陽韻)
桁 戸庚切(庚韻) / 胡郎切(陽韻)	鬢 乃庚切(庚韻) / 汝陽切(陽韻)

梗撰の耕韻・清韻・青韻の場合、上記の庚韻ほど大量の反切例は見当たらない。ただし日本呉音のア列音表記と関連付けられる情報は切韻系の『廣韻』の中に十分残っている。例えば耕韻字「萌」は呉音で「マウ」と表記されているが、既に指摘されているようにこの字は上古の陽部から由来したものである。

また『廣韻』の中に見られる「𦵑 普耕切(耕韻)・薄萌切(耕韻)」「𦵑 苦寒切(寒韻)・口耕切(耕韻)」は、明らかに日本漢字音体系の中でア列音として顕現する資格を有するものである。『廣韻』の中で反切下字が「萌」と成っている「庄・繡・緝・拏・𦵑・𦵑・𦵑・𦵑・𦵑・𦵑」等の耕韻字も主母音/a/相当の音価を持っていたと判断できる。耕韻字「萌」が両漢時代に陽部から来ている点、また漢音でも「マウ」と読まれている点も参照されたい。

清韻と青韻の一字両讀の場合にも日本呉音のア列音と対応するものが痕跡的に残っている。以下の通りである。

イ、清韻字 他方で上古陽部からの「庚・横・京」等の字を反切下字とするもの：

𦵑 丑貞切(清韻) / 丑庚切(庚韻)	窺 丑貞切(清韻) / 丑庚切(庚韻)
營 余傾切(清韻) / 虎横切(庚韻)	顛 是正切(清韻) / 渠京切(庚韻)

ロ、青韻字 他方で上古陽部からの「庚」字を反切下字とするもの：

𦵑 戸経切(青韻) / 客庚切(庚韻)	銓 桑経切(青韻) / 所庚切(庚韻)
---------------------	---------------------

上のようになると、呉音でア列音となる庚韻三等字・清韻三等字・青韻四等字がエ列音として現れるのは、決して偶発的でないことが顕著に見えてくる。

#### (4) 南朝と北朝の梗撰字の事象

ここでは南北朝期の中国全土を南方系と北方系とに分けて、南朝と北朝に焦点を当てながら、当時の詩歌の韻脚に見られる梗撰字の変化の違いについて考えてみることにする。南北朝期の詩人の作品を見る時、詩人の本籍だけに注目して南方系か北方系かを直ちに判断するのは危険である。東晋以降北方では少数民族の侵入により、多くの北方貴族が逃れて江南に移住することとなる。それ故に時代が下るに従って、詩人の活躍の舞台をたよりに南方系詩人か否かを判断すべきであって、本籍をたよりに単純に考えるのは当たらないのである。したがって、詩人が仕えた朝廷が南朝であるか、北朝であるかを見分けることが必要である。

南北朝時代の南北の王朝を見ると、以下の表6の通りである。南方では東晋以降宋・齊・梁・陳が交替するが、北方では五胡十六国が南方の東晋と対抗して混乱期が続き、北魏・東魏 / 西

魏・北齊・北周が続く。このなかで東魏と西魏は王朝としての寿命は短く、早く滅びてしまいそれぞれにかわって北齊と北周が起こることになる。

以下表のように概括的に分類すると、時期的に南方の宋・齊・梁は北方の北魏と対応している、陳は北齊・北周と相対応している。

表 6

南 方	北 方
トウシン 東晋 (317 ~ 420)	ゴコジウロクコク 五胡十六国 (304 ~ 439)
ソウ 宋 (420 ~ 479)	ホクキ 北魏 (386 ~ 534)
セイ 齊 (479 ~ 502)	トウキ 東魏 (534 ~ 550) / セイキ 西魏 (535 ~ 556)
リョウ 梁 (502 ~ 557)	ホクセイ 北齊 (550 ~ 577)
チン 陳 (557 ~ 589)	ホクシウ 北周 (557 ~ 581)

主に歴史学研究会(1994)・藤堂明保(1977)等を参考に作成

切韻系の梗撰各韻のなかで「青韻」が最も早く狭母音化したことは、既に明らかにされているところである。切韻系韻書『廣韻』の「青独用」という文献的記述、王力の研究(1936)と現代の中国方言実態がよくこの事実の存在を示している。

南朝の宋・齊・梁・陳と北朝の北魏・北齊・北周の梗撰の韻脚事情を眺めて見ると、南朝と北朝共に大体に見て、大きく一致してくる傾向がある。それは後の切韻体系にも反映されているように、青韻が独立していく流れが目立つことが取り上げられる。南北の音韻変化のテンポは各自めいめいであったはずであるが、南北共に青韻が先に前舌化へという共通点が広く見られるのは、梗撰の変化が中国言語音の内面においては基本的に同じ方向へ向かっていたことを意味するものであると考えられる。これは今日の北京語と呉方言の中古梗撰字の音韻的特徴とも一致している。他方南北の梗撰字が韻脚に現れる諸相は大きな違いが現れるところもあるということが認められる。これは音変化の遅速と関わるものと考えられる。

南朝の場合、梗撰二等字の「庚韻・耕韻」が三等字の「庚韻・清韻」、四等字の「青韻」と押韻する用例の場合、南朝では二等字が多出するのに対して、北朝はわりに少ない。

遼欽輯校の『先秦漢魏晋南北朝詩』によって調べた結果に基づき、南朝と北朝別に特徴的事例を取り上げておく。紙幅の関係で、用例はできるだけ典型的なものだけを取り上げることとする<sup>14)</sup>。

( ) 「二等字 + 三等字・四等字」型 このパターンは二等字が単独で三等字あるいは四等字と押韻する用例も含まれる。

南朝：

宋：[宋文帝]成屏清莖京英城旌『登景陽樓詩』中・p.1137；[謝靈運]成庭楹城征鳴纓箏聲清星『燕歌行』中・p.1152・生情齡營汀并萌京誠『白石巖下徑行田詩』中・p.1168・營庭薨營

明『塘上行』中・p.1189；[顔延之]溟成京營靈明垌薨英情征氓耕『車駕幸口侍遊蒜山作詩』中・p.1230；[湯惠林]莖榮生傾『贈鮑侍郎詩』中・p.1245；[鮑照]城情平榮生靈經行庭齡聲腥『代昇天行』中・p.1264・庭莖嬰爭『擬行路十八首』中・p.1274

齊：[王融]平清城生迎聲『長歌引』中・p.1387・情名并橫生瀛『迴向門詩』中・p.1400；[劉繪]青平莖情『詠萍詩』中・p.1469；[鍾憲]平生驚城營『登羣峯標望海詩』中・p.1473

梁：[梁武帝]青生名清齡星明生驚英萌榮形情『會三教詩』中・p.1531・炯溟萍形生『如炎詩』中・p.1532；[江淹]榮鳴橫英情生莖經『渡西塞望江上諸山詩』中・p.1558；[吳均]莖屏輕生『燈詩』中・p.1750；[陸雲公]行競鏡聖『釋奠應令詩』下・p.1852；[蕭子暉]靜屏冷永『寒夜直坊袁三公詩』下・p.1886；[王筠]爭鏡『觀海詩』下・p.2018；[梁元帝]平聲英情生明名卿清榮更鳴輕城『和劉尚書侍五明集詩』下・p.2038

陳：[沈炯]生平成兵城名情『長安還至山愴然自傷詩』下・p.2445；[陰鏗]傾輕生驚名『班婕妤怨』下・p.2450；[周弘讓]明清笙輕誠生『春夜醮五岳圖』下・p.2465；[張正見]鳴聲衡營『晨鷄高樹鳴』下・p.2471・迎城橫清明行『與錢玄智汎舟詩』下・p.2488；[陳後主]聲楹爭『三婦艷詞十一首』下・p.2502・庭輕鳴生聲『昭君怨』下・p.2503・京生薨迎名『洛陽道五首』下・p.2506；[江總]領並榮冷『雜曲三首』下・p.2574

## 北朝：

北魏：[宗欽]溟清生英『贈高允詩』下・p.2198；[高允]生輕冥兄『詠貞婦彭城劉氏詩』下・p.2203；[溫子昇]城橫『涼州樂歌二首』下・p.2221・景屏影靜冷警幸騁『從駕幸金墉城詩』下・p.2221

北齊：[裴讓之]驚兵生行『從北征詩』下・p.2262；[蕭愨]橫旌聲明成情城『和崔侍中從駕經山寺詩』下・p.2276

北周：[王褒]城兵生鳴『關係山月』下・p.2332・[庾信]城生行明聲『昭君辭應詔』下・p.2348・兵鳴名征明行營城成聲衡『奉報趙王出師在道賜詩』下・p.2360・橫行鳴驚平城『伏聞遊獵詩』下・p.2361・京城驚生聲輕明城笙情『奉和同泰寺浮圖詩』下・p.2363

南朝と北朝の「二等字＋三等字・四等字」型を見ると、次の二点が指摘できる。第一は「二等字＋三等字・四等字」型が南方系で多く見られ、北方系には比較的少ないことである。第二は「二等字＋三等字・四等字」型において梗撰二等韻字の頻出率が南方系で高く、北方系で低いということである。この点は梗撰二等字の異なり字数が南方系では「莖・箏・生・萌・薨・耕・行・争・横・冷・笙・衡」の12字もあるのに対して、北方系では「生・横・冷・行・衡・笙」の6字程度のもが見られることから判明できる。

このように考えていくと、二等字の異なり字数の格差自体は、南朝において梗撰の二等字・三等字・四等字ともその中心母音は、日本呉音のア列音に反映されうる/a/系列のものであった可能性が高いことを窺わせる資料となる。なお二等字の異なり字数からも明らかであるように/a/系列の主母音の支配する幅と量も南方の方が北方のほうをはるかに上回っていたことを示唆す

るものである。これに対して、北方系では四等の青韻が狭母音化へと先行する傾向を見せながらも基本的に同類の傾向を保持していた部分も大きい。しかしながら上記のイに見られる結果自体からも分かるように梗撰全体のなかで北方の梗撰の狭母音化は南方系と比べて著しい趨勢があったものと推測される。

( ) 「三等字・四等字」型

前記( )のように南北朝時代に南朝では二等字の/a/系列の主母音が部分的三等・四等字においても北朝より優勢を占めていたことは覆い様のない事実である。後になって中古の唐の音韻体系を反映する日本漢音体系では梗撰三等・四等字が工列音として表記されているが、このような原音側の音韻的体系と対応する変化は決して突如として現れたものではなく、漸次移行してきたものである。このような兆しは南北朝時代にすでに見えている。以下用例を取り上げる。

南朝：

宋：[謝靈運]征情溟聲『贈從弟弘元詩』中・p.1154・敬定性詠『答謝諮議詩』中・p.1156；[何承天]情兵庭旌英鳴傾清鯨城平誠『雍離篇』中・p.1205；[宋孝帝]庭清局明青情傾『拜衡陽文王義季墓詩』中・p.1221；[謝莊]庭青英明『懷花園引』中・p.1253；[鮑照]城局明并『贈故人馬子喬詩六首』中・p.1285・命迸性逕病定盛敬『與伍侍郎別詩』中・p.1288

齊：[齊高帝]庭征情英聲馨『塞客吟』中・p.1375；[王融]鈴清『永明樂十首』中・p.1393；[郊廟歌辭]靈牲『引牲樂』中・p.1495；[郊廟歌辭]明精寧靈『白帝歌』中・p.1497；[郊廟歌辭]靈經情『登歌二首』中・p.1507；[舞曲歌辭]明溟『聖主曲辭』中・p.1509；[舞曲歌辭]靈榮『明君辭』中・p.1510

梁：[江淹]形靈銘英平『潘黃門岳述哀』中・p.1573；[柳惲]榮靈『芳林篇』中・p.1674；[何遜]情聲明輕星傾『至大雷聯句』中・p.1712；[吳均]螢城星傾『入關』中・p.1720；[陸倕]京城楹溟征靈英垆旌瓊榮『和昭明太子鐘山解講詩』中・p.1775；[梁昭明太子]明情清庭『皇太子釋奠詩』中・p.1806；[簡文帝]名星輕聲屏『美女篇』下・p.1908；[戴暉]名清亭英精成『驅馬篇』下・p.2097；[郊廟歌辭]命定性政鏡慶『應王受圖曲』下・p.2183

陳：[陳後主]城迎庭『玉樹後庭花』下・p.2511

北朝：

北魏：[李騫]垆瀛輕聲汀驚營城荊明情冥『贈親友』下・p.2216；[祖瑩]城亭『悲彭城』下・p.2217；[王德]聲情屏征『春詞』下・p.2225；[雜歌謠辭]城星『賊爲楊津語』下・p.2239

北齊：[燕射歌辭]明并庭平『皇夏』下・p.2316；[燕射歌辭]明靈，庭聲『登歌三曲』下・p.2317

北周：[王褒]經亭涇涇形星青刑銘庭屏『從軍行二首』下・p.2330；[滕王宇文迪]亭鳴聲平清『至渭源詩』下・p.2345；[無名氏]靈形經貞『步虛辭十首』下・p.2439

梗撰三等字と四等字が互いに押韻している中で、先秦兩漢の陽部から由来したものはいずれももとより三等字(「兵・明・京・病」)、もしくは四等字(「慶」)であったものである。これは三等字と四等字が介音/i/の影響により後世の唐の/e/へとの移行が既に南北を問わず見られ

ていたと考えられる。但し既に( )のところで述べたように二等字の異なり字数の差にも現れている通り、二等字の主母音が波及した影響下に置かれた三等字と四等字の狭母音化は南が遅く北が速いというところにその相違がある。この傾向は後の中古音の体系、また日本漢音の体系にも投影されており、今日の中国の方言的対立までに長く尾を引いているものである。

邵榮芬(1963)では、八世紀の西北方言において既に庚韻三等字が清韻(三等韻)・青韻(四等韻)と区別されないことが報告されている。このような北方系の音韻的内容は決して唐に入って忽然として起こったものではない。それは南北朝期に見られる二等韻の影響の度合いからも推定されるように切韻以前の時期から始まる音韻変化の蓄積と考えなければならない。

北方系の音変化に拍車をかけた外的要因としては五胡十六国時代の北方少数民族政権の支配が考えられる。趙振鐸(2000)の説かれている通り、東晋以降アルタイ語系の民族が大部分の北方地域を支配していた。その代表的なのが鮮卑族である。趙振鐸の指摘は確かに重要な意味を持つものであることは間違いない。今日、中国の言語音の差異を考えるに当たり、北方地域を征服した民族としてその言語が北方漢民族の固有の言語に大きな影響を与えたであろうという自覚は当然持たなければならない。だが、北方漢民族の言語音がどのような影響を蒙ったであろうかという具体的問題については今後の更なる研究を待たねばならない。

#### (5) 陰声・陽声・入声の三者関係から見た梗撰字の周辺

陽声韻の梗撰(上古の「耕部」)字の音価が日本呉音体系ではア列音が優勢であるが、梗撰字と対応する陰声の支部韻と入声の錫部韻にも同様のア列音が登場する。これはア列音そのものが決して梗撰特有のものではなく、体系的に動いた原音側の音変化が日本漢字音に波及したものである。このような観点から見てもア列音が原音との関わりを持つものとして確固たる広い基盤を所有していたことが分かる。

日本漢字音の古層に当たる万葉仮名もその性格が基本的には呉音の体系と一致するものとされている。それ故にもう少し大きな視野の中で見ると、ア列音自体は陰声・陽声・入声の三者の中に顕現していることが次の如く指摘できる<sup>15)</sup>。

- イ、陰声： 宜<sup>ガ</sup>・奇<sup>ガ</sup>・移<sup>ヰ</sup>  
 宜/a/(上古歌部) /e/(中古支部)；奇/a/(上古歌部) /e/(中古支部)；  
 移/a/(上古歌部) /e/(中古支部)
- ロ、陽声： 明<sup>マ</sup>・英<sup>ア</sup>・寧<sup>ナ</sup>  
 明/a/(上古陽部) /e/(中古耕部)；英/a/(上古陽部) /e/(中古耕部)；  
 京/a/(上古陽部) /e/(中古耕部)
- ハ、入声： 益<sup>ヰ</sup>・釈<sup>シヤク</sup>・逆<sup>ギヤク</sup>  
 益/a/(上古魚部) /e/(中古錫部)；釈/a/(上古魚部) /e/(中古錫部)；  
 逆/a/(上古魚部) /e/(中古錫部)

同じくア列音に表記されているものであっても事情がやや異なっているところがある。イの場合、古層の万葉仮名ではア列音として現れるが、後の仏典において支韻はイ列音とエ列音となる。仏典の呉音において陽声の梗撰韻字と入声の錫韻等がア列音を持つ時期に陰声の支韻は主母音としてア列音を持たなくなる。これは陰・陽・入体系の中で陰声の方が早くも前舌化したことによるものである。今日の中国の方言事情からも、その裏づけが可能である。

ロ・ハの場合、現代方言を眺めて見ると、北方系では「盲(陽声)」・「白・百(入声)」等のごく稀な字を除き、ことごとく/i/・/ə/へと取って代わっている。南方系呉方言では/a/(陽声)・/a/(入声)音が整然として残っており、特に陽声韻では独特の「白讀」音系を成している。陽声韻尾/n/(/ŋ/の異音)と入声韻尾/?(/k/の名残)の退化の緩慢と関わるものかと考えられる。

五・六世紀になって日本呉音のア列音表記から支韻が撤退した最も大きな原因は歌韻がア列音を表記するのに最適の音表記文字であったことであり、さりとして原音側にア列音として表記できる/a/が支韻においてまったく姿を消してしまったということの意味するものではない。陽声韻と入声韻の音変化は、陰・陽・入声三者のなかでわりに遅く進行しているものである。

梗撰字を体系全体の範囲で見ても、日本呉音に顕現するア列音表記は決して孤立した音韻現象ではなく、音韻的対応の法則の存していることがわかる。

#### 四、おわりに

以上のように梗撰字の日本呉音におけるア列音表記は決して「千古の謎」ではないことが明らかになってきたであろう。

先行研究において梗撰字のア列音表記を朝鮮漢字音に由来するものと推定した説の最も大きな欠陥といえば、それは中国全土の方言を考慮に入れた視点が欠けていた点、原音側の方言事情に基づき溯上して呉音の梗撰字の祖系音を確認・設定する際、歴史的音変化と方言の南北差に対する考慮が十分至っていなかった点に尽きるものと考えられる。

原音側の中古音体系によって考える際、日本呉音では何故エ列音で捉えられるはずの梗撰字が二等・三等・四等いずれもア列音で現れてくるのであろうか。それは原音側の音変化 一部の陽部字の梗撰字への体系的移動 によるものと考えざるを得ない。また上記の音変化の原因以外に、その音変化の仕組みの詳細を考えると、南北朝時代にその音変化は南北に差異があり、南朝では日本呉音ではア列音で対応できる音価が優勢であったのに対して、北朝では外的歴史的変動と言語の内面的変容とが相俟って三・四等字が一步先んじて狭母音化へと移動が行われた結果、後になって呉音と漢音に異なる層を見せているものと考えられる。

本論では先行研究の届かなかった点を勘案しつつ、日本呉音の梗撰字の母胎音の追求を試みたものである。種々の事実を見渡すと、梗撰字が日本呉音の中で、ア列音として取り入れられているのは先秦・両漢における音変化が南北朝期まで強い影響を与えた時代的要因、また仏典



が主に南朝を通して日本に伝来した方处的要因が絡み合って現れた結果と考えられる。このように見たほうが推古遺文等に見られる万葉仮名と後の仏典に見られる呉音が体系的にほぼ一致してくる理由が理解しうるものと考えられる。

本論ではっきりしたことは、現代中国の方言差、特に呉方言の白讀体系、そして南北朝期の詩歌の韻脚の南北差などの状況を総合的に考慮した場合、日本呉音のア列表記は原音側の音韻変化と相對應するものであり、日本呉音が五・六世紀の原音を反映するとされている現今の一般説と照らし合わせてみた際、古代南朝との対応関係が著しいということである。

しかしながら、問題点はまだ依然として残る部分がある。例えば日本呉音の中で原音側の二等韻の字が直音と拗音の二種類として現れてくる点、また三等字と四等字が/ə/へと変化した具体的時期の南北差等である。これらの問題点については他の角度からの追求と更に精密化した方法論が要請されると考えられるが、これらの残された課題については引き続き検討していきたい。

#### <注>

- 1) 藤堂明保(1969)(p.293)参照。  
沼本克明(1982)(p.571) 参照。  
高松政雄(1986)(p.224) 参照。
- 2) 岡本勲(1968)は「日本漢字音に於ける規範と事実 佳掛画汰・牲甥等の字音を繞って」『国語国文』(1963年7月)には梗撰字についても述べられているが、着眼点は主に北方方言にあるようである。
- 3) 游汝杰(2000)は「方言に於ける文読音は隋唐の科举制度が実施されて以来形成されたものであり、白讀はもっと古い時期の音を伝え、文讀は(白讀より)やや後の音を示している。」としている。張光宇(1991)は「基本的に、白讀とは方言固有のものであり、…文讀とは外来音である。」とする。
- 4) 王力(1985)(p.83)参照。
- 5) 高松政雄(1986)(p.224) 参照。
- 6) 表3の例字はできるだけ表2のものと同じ範囲のものを選定するように努めた。表以外の関連字については本論で説いているとおりである。本論の呉方言の字音例は筆者の2002年4月と9月の実地調査による結果である。調査対象は若年層(二十代)と老年層(六十代)に分けて行った。調査時の発音者は土地生え抜きのものであった。調査地点は、上海・蘇州・杭州・温州で、若年層が合計4人、老年層が合計5人である。北京語の場合は、筆者の出身地が共通語地域に属するので、筆者の発音等にもとづいて表における音韻的記述を行っている。調査簿の作成においては王力(1985)・侯精一(1996)等を参考にした。
- 7) 沼本克明(1986)(p.11) 参照。
- 8) 沼本克明(1982)(p.52) に時代的・要因と方处的要因についての見解が記されている。
- 9) 王力(1980)(pp.164・555) 参照。
- 10) 羅常培・周祖謨共著(1958)(pp.196~197) / 丁帮新(1975)(p.129)参照。
- 11) 羅常培・周祖謨共著(1958)(pp.190・196~197) 参照。
- 12) 于安瀾(1936)(p.36) 参照。
- 13) 余迺永校注(1993)による。
- 14) 遼欽立(1983)を作業原本とする。
- 15) 沼本克明(1986)(p.62) 参照 / 大野透(1962)(pp.55・447・454) 参照。

#### <参考文献>

于安瀾 1936 『魏晉六朝韻譜』汲古書院

日本呉音と呉方言の音韻的対応関係(全)

- 王力 1936 「南北詩人用韻考」『王力語言学論文集』商務印書館
- 王力 1980 『漢語史稿』中華書局
- 王力 1985 『漢語音韻史』中国社会文化出版社
- 大野透 1962 『万葉仮名の研究』明治書院
- 大橋勝男 1992 『関東地方域の方言についての方言地理学的研究』第四巻 桜楓社
- 小倉肇 1995 『日本呉音の研究』新典社
- 黃坤堯 1998 「宋代詞韻與現代方言」『聲韻論叢』(第七輯)台湾学生書局印行
- 侯精一 1995 『現代方言音庫』上海教育出版社
- 邵榮芬 1997 『邵榮芬音韻學論集』首都師範大学出版社
- 曹道衡・沈玉成編撰 1993 『中国文学家大辞典 先秦漢魏晉南北朝卷』中華書局
- 高松政雄 1986 『日本漢字音概論』風間書房
- 逯欽立 1983 『先秦漢魏晉南北朝詩』(全三卷)中華書局
- 張光宇 1991 「漢語方言發展的不平衡性」『中国語文』語文出版社
- 趙振鐸 2000 『中国語言学史』河北教育出版社
- 丁邦新 1975 『魏晉音韻研究』中国台湾
- 藤堂明保 1965 『漢字語源辞典』學燈社
- 藤堂明保 1969 『漢語と日本語』秀英出版
- 藤堂明保編 1977 『漢和大辞典』学習研究社
- 藤堂明保編 1980 『中国語音韻論』光生館
- 沼本克明 1982 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』武蔵野書院
- 沼本克明 1986 『日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 船城俊太郎 1993 「変体漢文はよめるか『将門記』による検討」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂
- 馬瀬良雄 1964 「方言意識と方言区画」・『日本の方言区画』東京堂
- 余迺永校注 1993 『新校註互宋本廣韻』中国香港・中文大學出版社
- 游汝杰 2000 『漢語方言学導論』上海教育出版社
- 羅常培・周祖謨共著 1958 『漢魏晉南北朝韻部演變研究』科學出版社
- 李荣 1952 『切韻音系』中国科學院印行
- 歴史学研究会編 1994 『世界史年表』岩波書店

主指導教員(大橋勝男教授)、副指導教員(大石強教授・船城俊太郎教授)